

# 大牟田市 SDGs 未来都市計画

大牟田市

## < 目次 >

### **1 全体計画**

#### **1.1 将来ビジョン**

(1) 地域の実態 .....	3
(2) 2030 年のあるべき姿 .....	6
(3) 2030 年のあるべき姿の実現に向けた優先的なゴール、ターゲット .....	8

#### **1.2 自治体 SDGs の推進に資する取組**

(1) 自治体 SDGs の推進に資する取組 .....	11
(2) 情報発信 .....	14
(3) 普及展開策 .....	14

#### **1.3 推進体制**

(1) 各種計画への反映 .....	16
(2) 行政体内部の執行体制 .....	17
(3) ステークホルダーとの連携 .....	18

#### **1.4 地方創生・地域活性化への貢献 .....**

	20
--	----

# 1. 全体計画

## 1.1 将来ビジョン

### (1) 地域の実態

#### ① 地域特性

##### <地理的な特性、人口・高齢化率>

本市は、福岡県の最南端にあり、福岡都市圏と熊本都市圏の中間に位置し、北部・東部は標高100～300メートル程度の丘陵や山地からなり、西は豊かな自然と海産物に恵まれた有明海に面した面積81.45km<sup>2</sup>、人口114,496人(平成31(2019)年4月1日現在)の都市である。高齢化率は36.3%(平成31(2019)年4月1日現在)であり、日本の20年先を進んでいる。しかも、10万人以上の都市においては全国で2番目に高い。



##### <歴史的経緯>

#### ○人口21万人の中部九州中心都市だった

明治以降、三井三池炭鉱と関連コンビナートの興隆とともに急速な発展を遂げ、昭和35(1960)年の国勢調査では人口が約21万人にのぼり、中部九州における中心都市として、わが国産業・経済の発展に大きく貢献してきた。しかし、昭和30年代からの石炭から石油へのエネルギー政策の転換にともない、基幹産業が重大な打撃を受け、市勢は人口の減少、経済活動の沈滞等、厳しく推移してきた。そして、平成9(1997)年3月、ついに三池炭鉱が閉山を迎えた。

#### ○炭鉱閉山。人口の減少。新しいまちづくりへ

炭鉱閉山はアイデンティティの喪失ともいべき大きなインパクトをまちに与えるとともに、人口減少をはじめ、地域経済・社会や市の財政面に影響を与え続けている。こうした中において、本市は、これまで培った知識や経験を糧に、厳しい試練を乗り越えるため、新たなまちづくりに向けたその一歩を踏み出すことになった。

#### ○交通ネットワークの形成。企業誘致、新産業創出

閉山後の地域振興策としては、有明海沿岸道路・九州新幹線・三池港の広域的な交通ネットワークの形成をはじめ、多くの企業誘致や環境リサイクル産業などの新産業の創出・育成に取り組んできた。

#### ○全国各地・海外から視察が訪れる地域認知症施策、市を挙げたESDの取り組み

さらに、市民との協働のまちづくり、全国各地・海外から視察が訪れる認知症ケアコミュニティ推進事業等の展開、全ての市立小・中・特別支援学校がユネスコスクールに加盟し、市を挙げて「持続可能な開発のための教育(ESD)」を推進するなど、今後もまちが発展し続けるために必要となる基礎づくりを着実に進めてきた。

## ○宮原坑、三池港、三池炭鉱専用鉄道敷跡の世界遺産登録

平成 27(2015)年 7 月には、三池炭鉱が残した宮原坑、三池港、三池炭鉱専用鉄道敷跡が、「明治日本の産業革命遺産—製鉄・製鋼、造船、石炭産業—」の構成資産として世界遺産に登録された。これらの三池炭鉱関連資産が「世界の宝」となり、本市や炭鉱の歴史、生活文化などさまざまなヒューマンストーリーが改めて注目され、市民の郷土への誇りと愛着を持ち続ける上でのシンボルとなった。

## ○市制施行 100 周年。まちづくりは次のステージへ

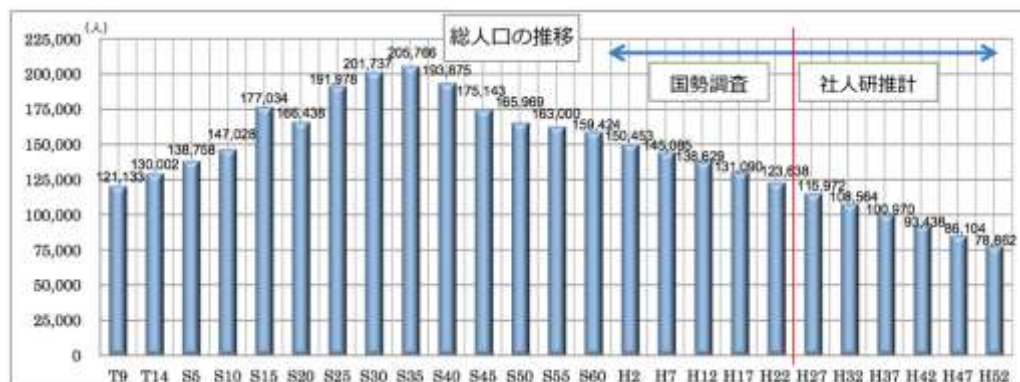
平成 29(2017)年 3 月、本市は市制施行 100 周年、さらには三池炭鉱閉山から 20 年を迎えた。市制 100 周年記念事業として、市民提案による自主事業をはじめ多くの記念事業が実施され、市民一人ひとりが本市の歴史や文化への理解をより一層深め、愛着や誇りを抱く契機となり、それを糧にまた新たなまちづくりの一步を踏み出している。

## ②今後取り組む課題

### <人口>

#### ○人口はピーク時から約 10 万人(約 40%強)の減少

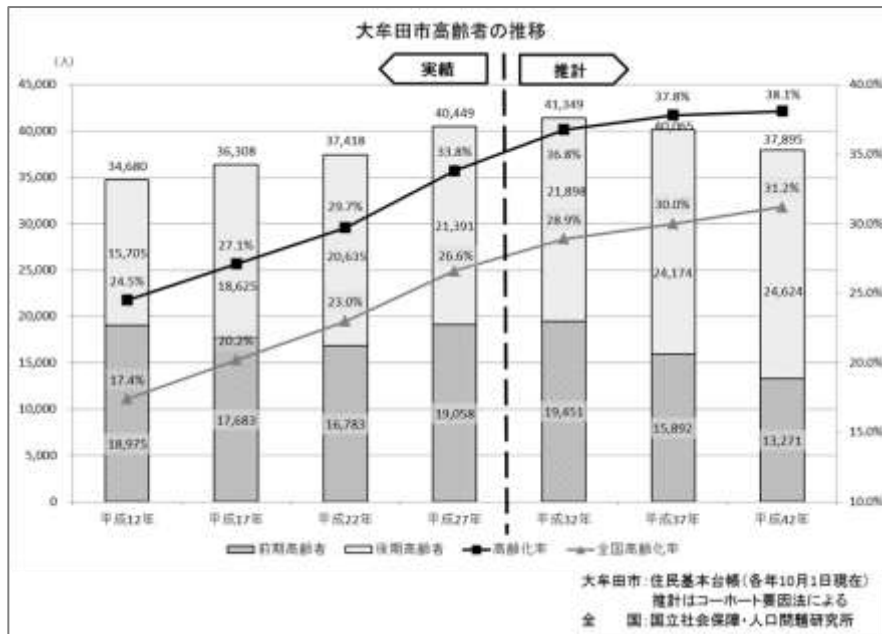
本市人口は、昭和 34(1959)年に 208,887 人(国勢調査推計人口)がピークとなり、以降、一貫して減り続けている。現在の人口は 114,496 人であり、約 10 万人減少している。それに伴い、過疎の弊害、さらには空きストックの利活用が一つの大きなテーマとなっている。



出典：国勢調査、国立社会保障人口問題研究所(H25.3 将来人口推計)

## ○高齢化の状況は、国や県の20年先を進んでいる

本市の高齢者は41,434人、高齢化率は、35.9%となっており、全国の28.1%や福岡県の26.8%と比較すると非常に高い割合になっており、国や県の20年先を進んでいる状況にある（各高齢者数・高齢化率は平成30(2018)年10月1日現在）。しかも、高齢化率は、10万人以上の都市において、全国で2番目に高い。それを見越し、本市は認知症対策などの福祉分野における地域社会や家庭の課題を包含した大牟田の独特な取組みを進めており、「大牟田方式」として国内はもとより、世界から注目されている。



## <産業>

### ○環境・リサイクル、エネルギー関連産業に加えたヘルスケアなど成長産業分野の振興

本市の産業別生産をみると、基幹産業である化学工業や窯業・土石をはじめとした製造業の占める割合が高く、地域経済を支える大きな柱となっている。一方で、地域経済が低迷するなど厳しい状況が続いており、本市として積極的に取り組んできた環境・リサイクル、エネルギー関連産業に加え、社会ニーズの高まっているヘルスケア産業など、成長が期待される分野について、市内に集積する関連企業や大学・高等専門学校との連携を進め、本市での事業展開の可能性を検討し、産業の多様化を積極的に推進する必要がある。

### ○世界遺産を含めた本市の近代化産業遺産と既存の観光資源の一体的活用

世界遺産を含めた本市の近代化産業遺産について、日本の近代化の歴史や施設の持つ価値を広く伝えていくことはもとより、本市が有する既存の観光資源と一体的に活用し、交流人口の増加につなげることが重要となっている。

## (2) 2030年のあるべき姿



(大牟田市：まちづくり総合プラン 2016～2019)

### ①2030年の本市の将来展望人口は99,211人

本市の人口ビジョンでは、合計特殊出生率の向上と人口動態の均衡を図ることによる2030年の人口展望を99,211人とし、人口減少に対応する様々な取組みを推進している。

そのような中、本市の人口動態を見ると、平成以降、自然動態および社会動態ともに減少している状況が続いているものの、推計人口(※1)と比較すると、現時点(2019年4月1日現在)では114,496人であることから、本市が目指している将来人口展望(上記表の緑線グラフ)に近い形で推移している。

また、住民基本台帳上での社会動態を見ても、10年前は1,000人を超える減少数だったものが、近年ではおよそ300～500人程度になるなど、改善の傾向も出てきている。

あわせて、平成29(2017)年の本市の合計特殊出生率は、国の1.43や県の1.51を上回る1.69となっており、国・県よりも総じて高い状況が続いている。

人口減少を止めることは難しいが、減少するスピードをゆるやかにしていくことは可能であると考えており、結婚や出産、子育て支援、また移住や定住の促進など、引き続き人口減少対策に取り組むこととしている。

#### ※1:推計人口

国勢調査の数値を基準として、住民基本台帳による出生者、死亡者、転入出者を加減して算出した人口

### ②人が育ち、人でにぎわい、人を大切にする ほっとシティおおむた

これからの新しい時代においては、このまちに暮らす人が、生まれ、育った郷土に愛着と誇りを持ち、安心して暮らすことができ、ずっと住み続けたいと思えるように、本市の独自性や強みに目を向け、これまでにない新しい視点や取組みを示しながら、「持続発展可能なまちづくり」を

進めていくことが求められている。

人口減少や少子高齢化が進む一方で、まちづくりに投下しうる行政資源は今後ますます先細って行く。そこで、これまで以上に人を中心としたまちづくりが必要となる。これは、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の「前文」の「人間」に関する項目と大きく重なる。

#### 人間

*我々は、あらゆる形態及び側面において、貧困と飢餓に終止符を打ち、すべての人間が尊厳と平等の下に、そして健康な環境の下に、その持てる潜在能力を発揮することができることを確保することを決意する。*



このようなことから、将来にわたって安心して暮らし、本市に住んでいることを自ら誇ることができるまちづくりを、市民とともに実現していくため、大牟田市の目指す将来の都市像として、「人が育ち、人でにぎわい、人を大切にする ほっとシティおおむた」を掲げ、その実現に向け取り組む。そのとき、本市における各施策の成果指標と SDGs の 17 のゴールとの関連を明確化することで、市民や事業者、まちづくり関係団体、行政で共有し、「Think Globally, Act Locally」の理念のもと、中長期的に将来を見通した持続可能なまちづくりを進めていく。

### (3) 2030年のあるべき姿の実現に向けた優先的なゴール、ターゲット

2030年のあるべき姿の実現に向けた取組みを進めるにあたっては、国のSDGs実施方針に掲げられた「持続可能で強靱、そして誰一人取り残さない、経済、社会、環境の統合的向上が実現された未来への先駆者を目指す」というビジョンを、本市における取組みに共通するミッションとして掲げ、国内はもとより、全世界の取組みに貢献することを目指す。

※本項における中長期的な目標や2030年のKPIについては、今後検討を進めることとしているため、現段階においては暫定的に設定しているものである。あわせて、2030年のあるべき姿の実現に向けて取り組む、目標設定の方向性及びSDGsのターゲットについての基本的な考え方を記載している。

#### (経済)

ゴール、 ターゲット番号	KPI(暫定)	
 <b>8, 2</b> <b>8, 9</b>	指標: 企業の活力があふれ成長するまちの実現(暫定)	
	現在(30年3月): 推進	2030年: 実現(暫定)
 <b>9, 1</b> <b>9, 2</b>	指標: 企業の新規立地(増設含む)(暫定)	
	現在(30年3月): 延 19 社	2030年: 延 67 社(暫定)

#### (ゴール 8)

地域経済の活性化に向け、技術革新の流れやグローバル化の進展を踏まえるとともに、広域交通ネットワークやものづくりの技術、整った教育環境や自然災害の少なさなどの地域の特性を活かし、産業の多様化を図るとともに、時代の流れに対応できる地域企業の育成や人づくりを進める。そのために、市内企業による技術力や生産性の向上、人材の育成、情報発信力の強化等に関する取組みを支援し、産業競争力の強化を図る。

あわせて、本市の固有の地域資源を観光面と商業面の両面で活かしながら、観光客の受入れ体制づくりやおもてなしの意識を醸成することで、交流人口の増加を図る。また、従来の商業機能だけではなく、人が集い、個性豊かで魅力的な商店街、個店づくりを支援することにより、まちのにぎわいづくりを進める。

#### (ゴール 9)



企業誘致は、雇用の創出、税収の確保、産業構造の多様化、市内企業の取引拡大に寄与するものであり、地域経済の活性化を図るためには、企業ニーズを踏まえた誘致を今後も継続する。本市には、これまでの歴史で積み重ねられてきたものづくりの技術があり、また、複数の産業団地を有しており、国内企業の積極的な設備投資を背景に、市内産業用地への企業立地が進んでいる状況にある。内陸型産業団地への企業ニーズは依然として高いことから、新大牟田駅南側産業団地整備に着手したところである。

あわせて、国・県においては、環境・リサイクルやエネルギー分野など、新たな産業の創出に向けた産学官金連携の取組みが進められている。本市においても、これらの取組みと連動し、市内企業の参画を促すとともに、企業の技術開発や人材育成、ネットワークの拡充等を支援していく必要がある。



これらを通じ、自発的・持続的な成長を続ける魅力豊かな企業にあふれたまちを実現する。

(社会)

ゴール、 ターゲット番号		KPI(暫定)	
	4, 1	指標: 将来に向けて意欲を持って取り組もうとする中学 3 年生の割合 (暫定)	
	4, 2		
	4, 7	現在(30年3月): 76.2%	2030年: 80.0%(暫定)
	11, 1	指標: 高齢になっても安心して暮らし続けられると思う市民の割合 (暫定)	
	11, 2		
	11, 4	現在(30年3月): 47.5%	2030年: 70.0%(暫定)
	11, 7	指標: 三川坑公開日1日あたりの来場者数(暫定)	
		現在(30年3月): 146人/日	2030年: 146人/日(暫定)

(ゴール 4)

児童生徒に、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させるとともに、激しく変化し続ける社会の中で、それらを活用しながら、自ら課題を発見し、主体的に解決できるようになるために必要な資質や能力すなわち「社会を生き抜く力」をはぐくむ必要がある。



そのため、本市においては、「持続可能な開発のための教育(ESD)」などの特色ある学校教育を展開するとともに、知育・徳育・体育のバランスが取れた教育を推進する。

(ゴール 11)

人口減少が進む本市においては、都市の空洞化が進み、市街化区域においては、空き地や空家等の低未利用地が拡大傾向にあり、都市活力の低下や防犯・防災、景観への影響が懸念されている。また、市街化調整区域では、耕作放棄地の増加や森林等の自然環境の荒廃、集落地域の活力の低下などが顕在化している。

こうした状況を踏まえ、市街化区域においては、「コンパクトシティ・プラス・ネットワーク」の考えに基づき、市民生活に欠かせない都市機能や居住の適正な誘導を図り、公共交通と連携したコンパクトな都市づくりを推進する。また、市街化調整区域においては、自然環境や優良農地に配慮しながら、産業の振興や居住環境の改善、既存集落の活力維持に寄与するものについては、地域の実情に応じた計画的な土地利用を進める。

(環境)

ゴール、 ターゲット番号	KPI(暫定)	
 12, 3 12, 5	指標:ごみ総排出量(暫定)	
	現在(30年3月): 38,092t	2030年: 32,611t(暫定)
 14, 1 14, 2	指標:市民のエコ行動の実施率(暫定)	
	現在(30年3月): 70.4%	2030年: 100%(暫定)

(ゴール 12)

環境負荷削減を進める上で、持続可能な生産と消費は非常に重要なテーマである。そこで、本市においては、地域社会を構成する市民、事業者、行政が各々の責務と役割分担に基づいて協働による3R(リデュース・リユース・リサイクル)を推進しながら、廃棄物の適正処理に取り組んでいる。これにより、資源の大量消費を抑制するとともに、環境への負荷が少ない循環型社会の構築に向け、ごみの減量化・資源化を徹底的に進めることにより、資源が循環することで、環境負荷の少ないまちを実現する。

(ゴール 14)

豊かな自然を守るとともに、将来にわたって持続可能な環境を残していくためには、市民一人ひとりが、自ら地球や自然の現状について理解と認識を深め、自主的な取り組みが行えるような支援体制の充実を図る必要がある。



本市においては、環境省レッドリスト掲載の絶滅危惧種等88種が存在しており(平成28(2016)年10月現在)、それらを活用した情報発信や環境学習を行うとともに、世界遺産である三池港やその先に広がる有明海をフィールドとした学習や、東京大学海洋教育センターと連携し、全国の海洋教育促進拠点や海洋教育校との交流を深めている。

こうした取り組みを通じ、豊かな自然と都市環境の中で、環境負荷の低減や自然環境の保全を進め、人々の暮らしに潤いのある地球にやさしいまちの実現を目指す。

## 1.2 自治体 SDGs の推進に資する取組

### (1)自治体 SDGs の推進に資する取組

#### ① 経済

ゴール、 ターゲット番号	KPI	
 8, 2 8, 9	指標:新規取引件数	
	現在(30年3月): 31件	2021年: 延80件
 9, 1 9, 2	指標:企業の新規立地(増設含む)	
	現在(30年3月): 19社	2021年: 延31社



#### ○企業の活力があふれ成長するまち


強い産業競争力を持ち、市場ニーズの多様化や経済のグローバル化などに対応して、自発的・持続的な成長を続ける魅力豊かな企業にあふれたまちを目指す。そのために、市内企業による技術力や生産性の向上、人材の育成、情報発信力の強化等に関する取組みを支援し、産業競争力の強化を図る。また、物流機能を強化し、三池港の利用促進を中心とした貿易の振興に取り組むことで、三池港背後圏企業の競争力の向上を図る。

#### ○新しい企業・産業が生まれ、はぐくまれるまち

本市のポテンシャルが活かされ、社会や地域のニーズを捉えた、新しい企業・産業が創出・育成され、活力あるまちを目指す。そのために、これまで取り組んできた環境・リサイクル、エネルギー関連産業をはじめ、新しい可能性を切り拓く産業を育成・支援するとともに、企業誘致による新たな産業の創出に取り組む。

#### ② 社会

ゴール、 ターゲット番号	KPI	
 4, 1 4, 2 4, 7	指標:将来に向けて意欲を持って取り組もうとする中学3年生の割合	
	現在(30年3月): 76.2%	2021年: 80.0%
 10, 2 10, 3	指標:障害についての理解度	
	現在(30年3月): 59.1%	2021年: 70.0%

	11, 1	指標：高齢になっても安心して暮らし続けられると思う市民の割合	
	11, 2	現在(30年3月)：	2021年：
	11, 4	47.5%	60.0%
	11, 7	指標：三川坑公開日1日あたりの来場者数	
		現在(30年3月)：	2021年：
		146人/日	146人/日

### ○社会を生き抜く力を育成する学校教育が充実しているまち

児童生徒に、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させるとともに、激しく変化し続ける社会の中で、それらを活用しながら、自ら課題を発見し、主体的に解決できるようになるために必要な資質や能力すなわち「社会を生き抜く力」をはぐくむ。そのため、「持続可能な開発のための教育(ESD)」などの特色ある学校教育を展開するとともに、知育・徳育・体育のバランスが取れた教育を推進する。また、各学校が多様な教育活動を展開することができるよう、学校教育環境を充実させる。

### ○障害があっても、みんなと一緒に自分らしく暮らせるまち

市民の障害に対する理解が進み、障害のある人が地域の中で自立した生活を送ることができるとともに、社会のあらゆる場面に参加できるまちを目指す。そのため、障害についての理解促進や障害福祉サービス等の充実に努めるとともに、障害のある人の社会的障壁をなくすために必要とされる合理的な配慮を行う。



### ○高齢になっても、住み慣れた地域で安心して暮らし続けるまち

すべての高齢者が、住み慣れた地域で、誇りと生きがいを持ち、安心して生き生きと暮らすことができるまちを目指す。そのため、住まいを中心として、生活支援、予防、医療、介護のサービスが状態に応じて提供される地域包括ケアシステムの構築に向けた取組みを進める。

### ○文化芸術に親しみ、心豊かに生活できるまち

郷土の歴史や遺産を大切に継承・活用し、郷土を愛する気持ちと誇りをはぐくむとともに、市民が文化芸術を通して心豊かで充実した生活を送ることができる文化の薫るまちを目指す。そのため、市民が文化芸術に親しみ、参加できる機会づくりや、郷土の歴史と遺産を大切に保存・継承する中で、先人達が培ってきた文化や知恵を学ぶ機会づくりを推進する。

### ③ 環境

ゴール、 ターゲット番号	KPI	
 12, 3 12, 5	指標:ごみ総排出量	
	現在(30年3月): 38,092t	2021年: 36,092t
 14, 1 14, 2	指標:市民のエコ行動の実施率	
	現在(30年3月): 70.4%	2021年: 83.0%

#### ○資源が循環する環境にやさしいまち

資源の大量消費を抑制するとともにごみの減量化・資源化により、資源が循環することで、環境負荷の少ないまちを目指す。そのために、地域社会を構成する市民、事業者、行政が各々の責務と役割分担に基づいて協働による3R(リデュース・リユース・リサイクル)を推進し、廃棄物の適正処理に取り組む。

#### ○地球や自然を大切にすまち

豊かな自然を守るとともに、将来にわたって持続可能な環境を残していくために、環境への負荷を少なくし、地球や自然を大切にすまちを目指す。そのために、市民一人ひとりが、自ら地球や自然の現状について理解と認識を深め、自主的な取り組みが行えるような支援体制の充実を図る。

## (2)情報発信

### (域内向け)

市民等に対しては、広報紙、ホームページ、コミュニティFM、SNS、メール配信情報システムでの情報発信を行うとともに、大型商業施設や公共施設でのイベントを通じて意識啓発活動を行う。

### (域外向け(国内))

本市の取組みがテレビ・新聞などマスメディアに取り上げられる機会や、本市の全国的なネットワークを活かして、SDGsについても情報発信を行っていく。

### (海外向け)

友好都市である中国大同市との環境教育・技術の研修などを実施していくとともに、市内の世界遺産や動物園での動物福祉に関する取組みを英語で紹介するなど、国内に留まらず海外に向けての情報発信を行う。

## (3)普及展開策

本市における、多様なステークホルダーとの連携による「経済」・「社会」・「環境」の三側面における統合的な取組みは、SDGsを今後推進していく他の地域におけるモデルとなりうると考えられる。

そこで、(2)情報発信に掲げる多様な媒体やアピールの場を活用し、以下の5つの視点を念頭に域内外に対し効果的に情報発信をすることで、更なる普及展開を図る。

### ○全国の20年先を歩む、10万人以上の都市において全国で2番目に高い高齢化率

本市の高齢化率は35.9%(平成30(2018)年10月1日現在)であり、日本の20年先を進んでいる。しかも、10万人以上の都市においては全国で2番目に高い値である。

そのような本市の多様な価値観の擦り合わせや域内の問題の優先順位づけなどの合意形成プロセスの円滑化や、域内住民が地域の暮らしや問題の自分事化に向けた取組みは、10万人～30万人規模の中都市の持続的なモデルとして、社会に大きなインパクトを与える。

### ○三大都市圏と並ぶ人口のダム機能として期待される「定住自立圏」の中心市

本市と圏域の3市2町(柳川市、みやま市、荒尾市、南関町、長洲町)は、「有明圏域定住自立圏」を形成し、「人が住み、自然とやさしさあふれる活気ある圏域」を目指す「有明圏域定住自立圏共生ビジョン」を策定し、本市はその「中心市」としての役割を担っている。自治体間連携によるシナジー効果を発揮させ、人口定住の受け皿となるべき中心市のあり方としても参考になる。

### ○人口減少下にある多くの都市が抱える「近代化レガシー」を生かした持続的まちづくり

今後、ほぼ全ての都市が直面する「人口減少」において、本質的な課題となるのが、「近代化」にともなって整備を進めた都市機能における余剰ストックや空きストックの利活用及び維持管理である。また、もともと観光都市ではなかった地域が、交流人口の増加を狙い地域の魅力を高めることも大きな課題である。その意味で、本市が目指す「近代化レガシー」を最大限生かした持続的なまちづくりは、他地域にとって参考になる。

### ○一人ひとりの地域や社会の持続性への関心を引き出し生かす「学び」の拡張、展開

人口減少に応じて行政機能が縮小することもほぼ全ての地域において避けられない状況であり、そこで官民が協働し、また、一人ひとりの地域や社会の持続性への関心を引き出し生かすことも決定的に重要なテーマである。その点で、ESD を全国に先駆けて組織的に展開し、さらに持続可能な社会の担い手づくりに向け、あらゆる世代における主体的な学びや活動の機会づくりを展開していく本市の取組みが、一つの示唆を生み出す。

### ○西洋とは異なる人間観に基づく日本的な SDGs の体現

最後に、本市の「世界遺産」は、非西洋国家で初めて産業化に成功したことが評価されているのであるが、現在は日本が世界的な高齢化の最前線を走っている。ここで、西洋とは異なる人間観に基づく日本的な SDGs を体現していくことは、アジアはもとより、既存の考え方に限界を感じる欧米の都市に対して多くのヒントを提供することになる。

## 1.3 推進体制

### (1) 各種計画への反映

#### (大牟田市第6次総合計画)

現第5次総合計画が、令和元(2019)年度に終期を迎えることから、現在、第6次総合計画の策定を進めている。

総合計画においては、本市を取り巻く社会背景と課題を記載することとしているが、その中で、「人口減少・少子高齢化と地方創生」、「地域経済と技術革新・グローバル化」、「地域共生社会の実現や安心安全のまちづくり」、「人口減少時代に求められる行財政運営」に加え、「持続可能な社会の実現」の項目を加え、SDGsのこれまでの経緯や今後の方向性について明記することとしている。

各施策やその成果指標の設定についても、SDGsの17のゴールや169のターゲットを意識することとしており、それぞれのページや一覧表等において、各アイコンを添付するなど、その関係性を明確にする予定としている。

#### (環境基本計画)

大牟田市は、かつて我が国最大の出炭量を誇る三井三池炭鉱を擁し、石炭産業の興隆とともに、石炭、石炭化学、機械工業、非鉄金属を基幹産業として発展してきた。一方、その発展過程においては、工場・事業場からのばい煙による大気汚染や、工場排水などによる水質汚濁といった公害問題が生じ、3,000人を超える呼吸器疾患などの健康被害者を出す深刻な状況となった。そうした状況であったが、本市では、市民、事業者、行政それぞれが環境問題に取り組むことにより、公害を克服することができた。

以降、環境の世紀と言われる21世紀の本市の環境づくりにあたり、市として良好な環境の保全と創造に向けた取り組みを進めるにあたっての指針として、平成14(2002)年3月に大牟田市環境基本条例と環境計画を策定した。

現在も、環境保全に向けた取り組みとともに、「低炭素社会」「資源循環型社会」「自然共生社会」等の実現に向け、生活排水対策やごみの減量化・資源化等に対する意識の醸成を図りながら、市民、事業者、市民団体、行政の協働により、環境負荷低減に向けた取り組みを進めている。現第2次環境基本計画が令和3(2021)年に終期を迎えるにあたり、今後も引き続き、「低炭素社会」「資源循環型社会」「自然共生社会」等の実現を基本的な考え方としながら、SDGsにおける経済・社会・環境の三原則を念頭に、第3次基本計画を策定する予定としている。これにより、環境への負荷が少ない持続可能な循環を基調とする社会の構築を図るとともに、それを将来世代へと引き継ぐことができるよう取り組む。



## (2) 行政体内部の執行体制

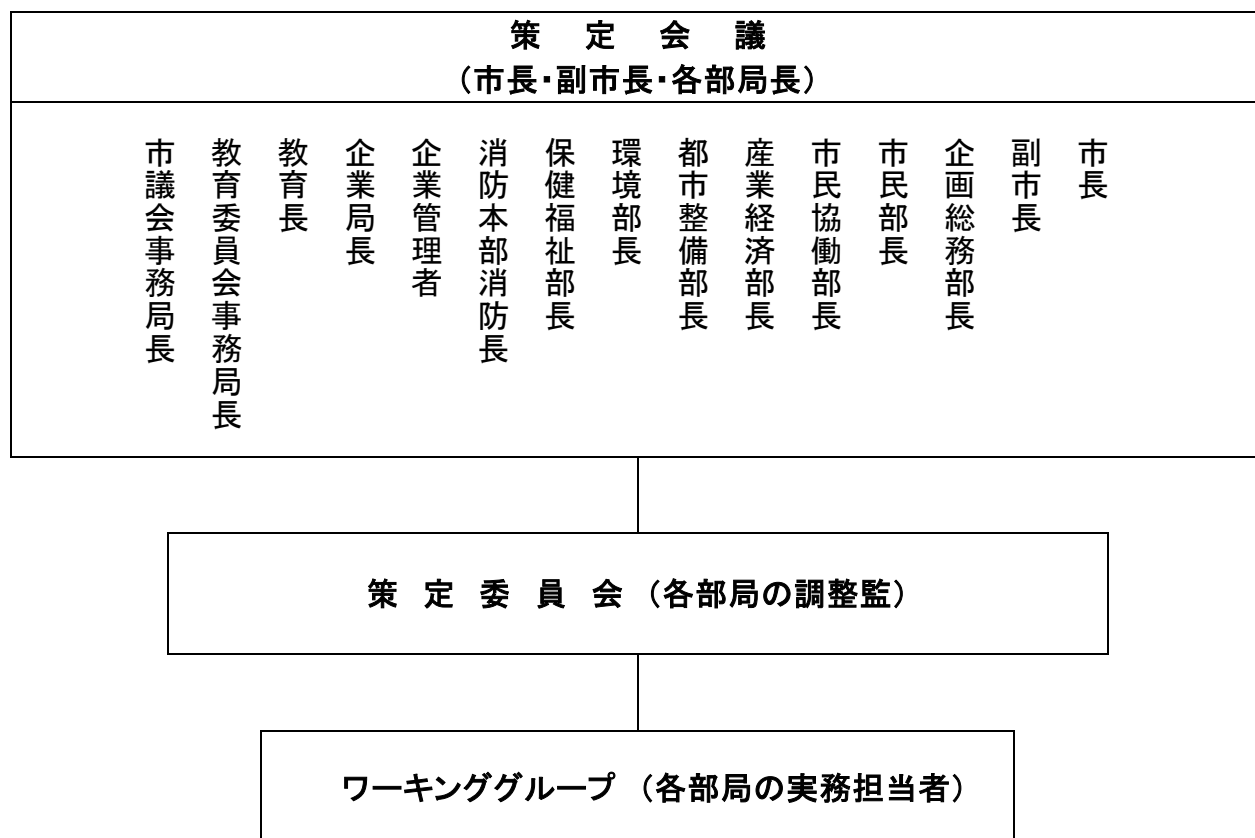
SDGsを達成するためには、市民と行政がまちづくりの目指す姿を共有し、多様化・複雑化する地域課題に、柔軟かつ適切に対応し、戦略的な視点をもってまちづくりを進めていくことが重要である。

また、SDGsを推進するにあたっては、本市が目指すまちの姿やそれらを達成するための施策等をあらかず総合計画との連動性を持つことで、具現化・見える化を図る必要がある。

そこで、市の内部組織として、現在設置している「総合計画策定会議」及び「総合計画策定委員会」において、第6次総合計画の策定とともに、庁内の横断的総合的なSDGsの推進について検討や決定を行なうこととする。

あわせて、各部局の実務担当者レベルでのワーキンググループを設置し、SDGs達成に向けた職員の意識改革や関係部局における横断的な連携を図る。

【大牟田市 SDGs 推進体制】(イメージ)



### (3) ステークホルダーとの連携

#### (域内外の主体)

##### ①大牟田未来共創センター

平成 29(2017)年 2 月に本市と NTT 西日本、NTTの三者による「地域密着型リビングラボ実証実験」に関する包括協定を締結し、これまで官民協働による様々な生活課題の解決のための新たなサービスの開発プロセスの検証に取り組んできた。

そうした中、市民が家族や地域住民とのつながりの中で、豊かな暮らしを実現できるよう支援し、地域共生社会の構築を推進するための官民協働のマネジメント組織が必要という共通認識のもと、設立されたのが一般社団法人「大牟田未来共創センター」である(H31(2019).4.1 設立／市も社員として参画)。

当該センターは、「パーソンセンタード」という認知症ケアが生み出してきた「人間観」を「潜在能力」「つながり」「物語」に注目したサービスを、住民や地域との共創を通して生み出すとともに、市民文化(心映え)として浸透させ、その価値を世界に情報発信する試みとして、福祉、産業・経済、教育、文化等各分野の学識者や実践者との交流を進めることとしている。

本市が SDGs に取り組むにあたっては、当該センターとともに進めることとしており、当該センターを通じて域内外の多様なステークホルダーとの連携を図る。

##### ②大牟田まちづくり市民会議

大牟田まちづくり市民会議は、市勢の発展と市民生活の向上を図ることを目的に、市長をトップに行政、議会、経済、文化等、各界各層の会員で構成された全市民的な組織であり、前身である大牟田再開発市民会議が昭和 55(1980)年 3 月に発足してから今日まで、大牟田市の地域振興に関わる重要な取組みを行ってきた経緯がある。

近年では、九州新幹線の全線開通に向けた取組みや世界遺産の本登録に向けた取組みに対する支援をはじめ、地方創生において産官学金労言の参画が求められたことから、地方創生やシティプロモーションに向けた取組みへの参画を行っている。

SDGs に取り組むにあたっては、本市民会議を通じ、ステークホルダー間の理念の共有や意見の集約を図りながら進める。

##### ③大牟田市 ESD 推進協議会

平成 29(2017)年に持続可能な社会の実現をめざし、よりよい社会づくりに貢献する人を育てるとともに、人と人、人と自然、文化、社会などとのつながりを深め、未来につながる活動を幅広く推進し、地域の発展に寄与することを目的として、教育関係者 OB や市内の団体・企業などにより「大牟田市 ESD 推進協議会」が設立された。

これにより、ESD の推進に向け、小中学校と行政、市民とが一体的に取り組むこととなったが、SDGs の取組みにあたっては、ESD の趣旨に賛同している団体・個人を通じた協力関係が築きやすいと考えられるため、密接な連携を図ることとする。

## （国内の自治体）

### ①有明圏域定住自立圏

本市は、福岡県最南端に位置していることから、本市を中心市として、福岡県側のみやま市・柳川市と熊本県側の荒尾市・南関町・長洲町による有明圏域定住自立圏を構成し、有明圏域定住自立圏共生ビジョンに基づき、「生活機能の強化」、「結びつきやネットワークの強化」、「圏域マネジメント能力の強化」の3つの視点から様々な取組みを進めている。

具体的には、認知症 SOS ネットワークの構築や図書館の相互利用、人材育成などに取り組んでおり、今後は有明海再生に向けた取組みなどの検討を進めることとしている。有明圏域定住自立圏における新たなトピックとして、圏域自治体間で SDGs を念頭に、また新たな取組みの検討を進めたい。

### ②全国のユネスコスクール加盟小中学校や企業との連携

学校教育において、地域の SDGs の達成に貢献しつつ、全国レベルで持続可能な ESD の推進体制を構築するため、先進的に ESD に取り組む全国10市町の教育委員会が参画する「SDGs／ESD 教育委員会コンソーシアム」を平成 30(2018)年度に創設し、「ユネスコスクール・SDGs／ESD 教育委員会サミット」を開催するなど、相互に連携する体制づくりを進めている。

あわせて、全国及び各地域での学校教育における SDGs／ESD のさらなる充実を図るために、大牟田市教育委員会が中心となり、SDGs／ESD を推進する国内の関係機関・団体等と連携して、学校現場での SDGs／ESD の推進及び指導等を中核となって担う教員を養成するための研修会を開催した。

今後こうした取組みを通じ、全国のユネスコスクール加盟小中学校との連携を進める。あわせて、企業との協働による SDGs／ESD に関する研修会を開催する。

## （海外の主体）

### ユネスコ本部や国際連合大学との連携

国際連合大学(国連大学)との連携による「ESD の深化と広がり」を通して SDGs の達成への貢献を目指し、次のことに取り組むこととしている。

○国連大学関係者や SDGs／ESD 関係者を招き、研究発表会を開催する。

○地域社会で ESD を実践する拠点として国際的なネットワークに参画することを目指す。

## 1.4 地方創生・地域活性化への貢献

100 有余年にわたり本市の基幹産業をなしてきた三井三池炭鉱が、平成 9(1997)年 3 月について閉山を迎えた。

以降、全市民が一丸となり、閉山後の地域振興策として、有明海沿岸道路・九州新幹線・三池港の広域的な交通ネットワークの形成が図られ、本市としても環境・リサイクル産業をはじめとした新産業の創出・育成に取り組み、多くの企業立地や物流機能の充実が実現するなど、徐々にではあるが成果も見られるようになってきた。

さらに、多くの市民を巻き込みながら進めている、ESD による持続可能な社会を創る担い手の育成、認知症の人や家族を地域全体で支える認知症ケアコミュニティ推進事業などの取り組みは、高い評価を受け、全国各地・海外からも視察や取材が相次ぐなど、本市のまちづくりのまた新たな柱へなりつつある。

しかしながら、本市長年の課題である人口減少や少子高齢化に歯止めをかけるには至っておらず、今後のまちづくりに必要な行政資源の減少が予想され、さらには、社会環境の急激な変化により、VUCA(※2)という言葉に象徴されるような予測困難で不確実な時代を迎えつつある。

一方で、昭和 30 年代中頃から一貫して続く人口減少、そして、国平均や県平均の 20 年先をいく高齢化率、それに伴う地域経済の縮小や地域活力の低下といった本市の課題は、今後、日本や世界の各都市においてもいずれ訪れる共通の課題であり、その課題解決に向けた取り組みは、先行事例として本市の言わば“ウリ”にもなりうる。

そこで、本市の課題を課題としてのみ捉えるのではなく、今後のまちづくりにどう活かすかという視点から、これまで地域振興策として先進的に取り組んだ成果とともに、SDGs の観点から経済・社会・環境の三側面から本市の貴重な地域資源として改めて紡ぎ直す。あわせて、今後のまちづくりに向けた理念や目標をビジョンとして明確化することにより、行政のみならず、地域住民や企業をはじめ、内外のより多くのステークホルダーを巻き込み、更なるシナジー効果の発現を目指す。

さらには、「パーソンセンタード」という新たな価値観によるリビングラボや、近年多くの来訪者を迎える動物園や世界遺産の一体的な活用を進めることで、外から資金を呼び込み、それを地域づくりへと結びつける仕組みを構築し、今後の自立的な好循環に結び付ける。

こうした取り組みにより、市民一人ひとりが本市の歴史や文化への理解をより一層深め、愛着を抱く契機とし、本市のまち・ひと・しごと創生(地方創生)へと確実に結びつける。

※2:VUCA(ブーカ)

Volatility(変動性)・Uncertainty(不確実性)・Complexity(複雑性)・Ambiguity(曖昧性)の 4 つの言葉の頭文字をとったもの。混沌として予測不可能な状況にある、現代の経済環境を示す言葉として使用される。



大牟田市 SDGs 未来都市計画

令和元年 8 月 第一版 策定